

令和五年度一般選考試験

試験問題

国語

受験上の注意

- 一、答えはすべて解答用紙に書きなさい。
- 二、問題は十四ページあります。
- 三、試験時間は六十分です。
- 四、解答に字数制限がある場合、句読点や符号は一字と数えます。

三重中学校

受験番号

【一】次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

ヤマビルは、音もなく人間に忍び寄る。目はない。鼻の穴も空いていない。どのようにして、人間を見つけるのだろうか。ヒルにそっと指を伸ばすと、さっと乗り移ってくる。鉛筆やシャーペン<sup>えんぴん</sup>を差し出しても、知らんぷりなのに、なぜだろう。

「どうして指と鉛筆の見分けがつかくの」

「鉛筆は温かくないからだ」

鉛筆を **A** から、そっとヒルに近づけてみた。ヒルは、あれっという感じで、鉛筆に興味を向けたように見えたが、上がってくることはなかった。

「生物と無生物の見分けがつかのかな」

「目もないのに、無理だよ」

「でも、温かさには、関係がありそうだね」

次の研究日、子ども研究員たちは、学校の実験でよく使う円形の水槽と、小さいジャムの瓶を二本用意した。一本には氷と水を入れ、もう一本には四〇度の湯を入れる。水槽には、それら二本の瓶と、ヤマビルを二〇匹入れ、蓋をする。この状態で、ヤマビルの動きを観察するのだ。

ヒルたちは適当に歩き回っていたが、しばらくすると、温かい瓶のほうに集まり始めた。瓶の周りにへばりついている。瓶の側面を上り始めたものもいる。

「やった。実験成功」

「温かいものに集まるのだね」

「僕にいい考えがある。瓶に入れるお湯の温度を変えて、どの温度が好きか調べてみようよ」  
さらに細かくデータを取ろうというのである。

「もっと大きな水槽がないと、無理じゃない」

「それなら、いろいろな温度の瓶を作って、順に入れていき、来るか来ないかを調べたらいいよ」

「水道の水から、一〇度ずつでいいんじゃない。そこまで正確な温度は必要ないよ」

「水道水は、二一度」

「じゃあ、三〇度、四〇度、五〇度でいいんじゃない」

「低いほうはいいかな」

「二〇度を集まらなかったら、それ以下はいらないよ」

「じゃあやってみよう」

こうして、再実験が始まった。まずは、水道水を入れた瓶をヒルのいる水槽に置く。みんながじっと見守る中、ヒルたちは何事もなかったかのように、それぞれ気に入ったところにじっとし

始めた。**B**、水道水には反応しなかったということである。

次に試したのは、三〇度の湯である。少し温めて三二度くらいにしたものを、水槽に入れた。すると、瓶の近くにいたヒルが、瓶のほうに少しずつ寄っていく様子が見られた。瓶から離れている個体は、瓶の温度に気づいていない。

四〇度の湯の瓶を入れてみると、瓶のそばのヒルはすぐに反応し、瓶めがけて突進してきた。離れたところにいたヒルも、何かを感じて寄ってきた。さらに、少々熱めの五〇度で試してみる。さすがにこれには近づくものがない。少し関心は寄せたが、すぐUターンして離れていく。熱いのは嫌いなようだ。

こんな遊びのような実験を繰り返しているうちに、気づけば二二時を回っている。子どもたちは大急ぎで入浴し、寝袋に入った。風呂の順番待ちの最中に、今日のまとめを書く。

(樋口大良 『ヒルは木から落ちて来ない。ぼくらのヤマビル研究記』)

問1 文中の**A**に入る内容として最も適切なものを、次のア～オから一つ選び、記号で答えなさい。

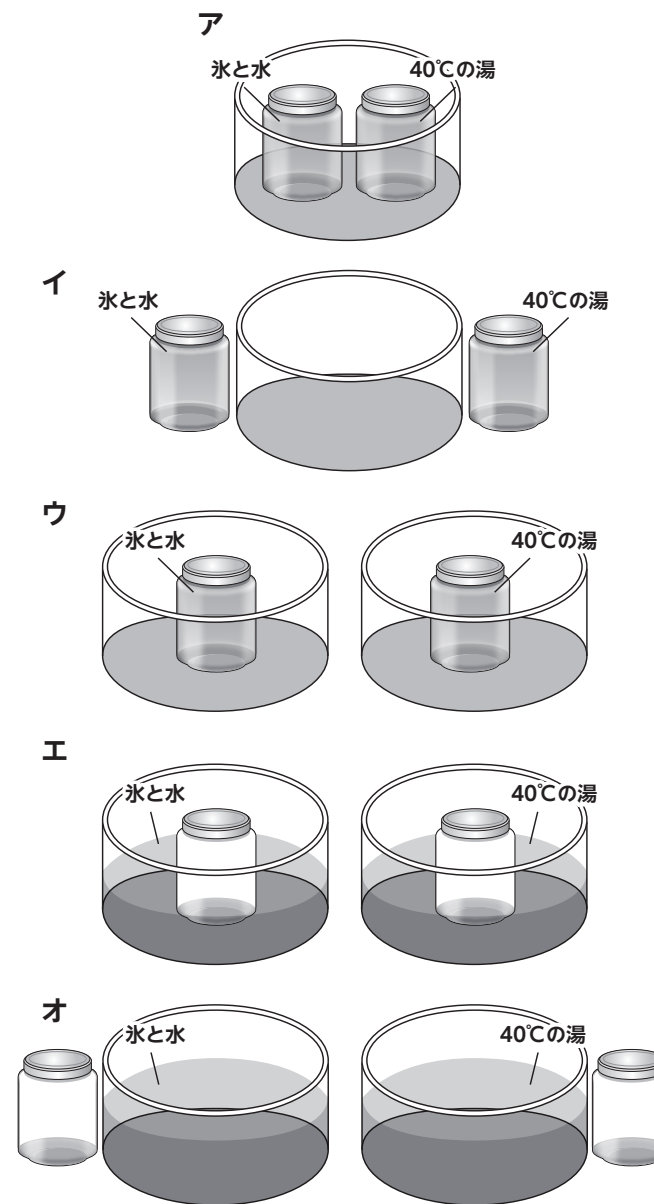
- ア 氷水で冷やして
- イ 削って尖らせて
- ウ 水道水で濡らして
- エ 脇に挟んで温めて
- オ 握ってにおいをつけて

問2 文中の**B**に当てはまる言葉を、次のア～オから一つ選び、記号で答えなさい。

- ア つまり
- イ また
- ウ けれども
- エ むしろ
- オ やはり

問3 —— 線1 「この状態」を表した図として最も適切なものを、次のア～オから一つ選び、

記号で答えなさい。ただし「ヤマビル」と水槽の「蓋」は、設問の都合上、図に表現してありません。



問4 この文章を参考にして、実験のレポートをまとめる練習をしました。次のレポートに

ついて、あとの各問いに答えなさい。

ヒルは

きっかけ

氷と水を入れた瓶と、40℃の湯を入れた瓶とで比べた実験からヒルは温かいものに集まる性質があることが分かった。そこで、ヒルが最も好きなのはどの温度かくわしく知りたいと思ったから。

調べたいこと

ヒルが最も好きなのは何度か調べたい。

実験に使う道具

・円形の水槽 ・瓶 ・ヤマビル

方法

結果

お湯の温度	ヒルの動き
20℃	<input type="text" value="③"/>
30℃	瓶の近くの個体： <input type="text" value="④"/>
	瓶から離れた個体： <input type="text" value="⑤"/>
40℃	瓶の近くの個体： <input type="text" value="⑥"/>
	瓶から離れた個体： <input type="text" value="⑦"/>
50℃	・ 近づくものがない ・ <input type="text" value="⑧"/>

わかったこと

ヒルは30℃の湯で少し反応し、40℃の湯で最もよく瓶に集まってきた。50℃の湯からは離れていった。40℃がヒルの最も好きな温度のようだ。

この実験で40℃に最もよくヒルが集まることは分かった。次はなぜその温度の湯をヒルが最も好むのかを考え、実験で調べたい。

(1) ①に入る適切な語句を、十字前後で本文中から抜き出して、レポートのタイトルを完成させなさい。

(2) ②に入る内容を、本文中の言葉を使って、四十字以上五十字以内で答えなさい。

(3) ③と⑧に入る内容を、それぞれ本文中の言葉を使って答えなさい。

(4) 実験の「結果」をこのように表にまとめることで、どのような効果がありますか。最も適切なものを、次のア～オから一つ選び、記号で答えなさい。

ア 実験がどのように進んだかが分かりやすくなる。

イ ヒルが湯に反応した様子を想像しやすくなる。

ウ 温度ごとのヒルの反応を比べやすくなる。

エ 湯を入れた瓶の温かさを実感しやすくなる。

オ 時間によるヒルの変化が読み取りやすくなる。

(5) ⑨に入る語句として最も適切なものを、次のア～オから一つ選び、記号で答えなさい。

ア 実験の感想

イ 今後の展望

ウ 結果の予想

エ 全体のまとめ

オ レポートの反省

【二】次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

「おらあ、おくれるの、いやだなあ。」

ひとりがこないからといって、自分まで遅刻ちこくするのはたまらない、と吾一ごいちは思った。それに、けさは一時間※1めが修身しゅうしんだ。修身の時間におくれたりするのは、なお、いけない。

「じゃ、おいてっちまうのか。」

京造きょうぞうはほおをふくらました。

「秋ちゃんがあとからきたら、かわいそうじゃねえか。」

そう言われてしまうと、<sup>1</sup>自分のほうがまちがつてるような気がして、吾一は、あとのことばが出なかった。

「もう少し待とうよ。秋ちゃん、もう、じき、くるよ。」

京造はおつかぶせるように言った。だれもこのことばに、反対する者はいなかった。

たき火の上には、また、<sup>※2</sup>こっばがかさねられた。<sup>2</sup>青いけむりがしばらく、くすぶっていたが、まもなく、ぱあっと燃えあがった。

「京ちゃん、もう学校じゃないの。八時ですよ。」

うちの中から、おっかさんの声がした。

「いいんだよ、まあだ。」

京造は、はね返すように答えた。彼は丸太かたに腰こしをかけて、いい気もちそうに、またをあぶっていた。

店の正面の大黒柱にかかっている、大きな柱時計が、八つ鳴った。

たき火から離れたところはなに立っていた吾一は、

「ああ、寒い。」

と言いながら、足ぶみするように、両方の足を二、三べん①動かした。じっとしていることが、彼にはどうにもならなかった。

「まあ、あたれよ。」

京造は竹の先で、たき火の火をなおしながら言った。

しかし、吾一は火にあたるどころではなかった。もう※3小使こしさんが一番鐘かねを鳴らしている時分だ、と思うと、気が気ではなかった。

「だけど、秋ちゃん、おそいな。」

吾一と同じ組の作次さくじが、たき火のそばで大きなあくびをした。

「迎えに行ってみようか。」

それを受けて下級の者が、恐る恐ることばをくださった。

「そうだなあ。――」

京造も **A** 腰をあげた。

「しよがねえやつだな、あいつ。」

そばに置いてあるバケツの水を、彼はぱっと、火の上にぶちまけた。

「じゃ、みんなして、秋ちゃんちへまわって行こう。」

彼らは、 **②** 往来に出た。

けれども、秋太郎のうちは、学校へ行く道すじから少し横にそれていた。これからすぐ駆けて行っちゃって、まに合うかどうかわからないのに、そんなほうにまわっては、当然、遅刻するにきまっている。吾一はみんなが動きだしたのを <sup>※4</sup>しおに、

「おら、まっすぐ行くよ。」

と、言い放って、急に彼らのあいだから抜けてしまった。そして、ひとりっきりで、いっさんに学校のほうへ走って行った。

背なかで、なんか声がしているようだった。

組の者、おいてっちまうのか。

点とり虫！

おべっかつかい！

しかし吾一は、そんなことばなんか、 **③** うしろ足でけとばしてしまった。なんと言われたって、学校におくれないほうがいいんだ。先生がくる前に、運動場にちゃんとならんでいるほうがえらいんだ。――

しばらくすると、「わあっ！」という声が、うしろのほうでした。

彼らが追いかけてきたのかもしれない。吾一は追いつかれないように、前よりも足を早めた。

「おーい。」

大ぜいの声が **④** 迫ってきた。

「待っててえ。」

「おーい。」

「吾一ちゃんん！」

「いっしょに行こう。」

校門のところへきた時に、授業のはじまる鐘が鳴りだした。吾一は、いくらか **B** 気もちで、うしろをふり返った。

そこへ、みんなもどやどやと駆けこんできた。

吾一はてれかくしに、<sup>3</sup>えがおをつくって、彼らを迎えた。

校庭にはもう、どの組の生徒も、それぞれの位置に列をつくっていた。吾一はおくれてきた連中といっしょに、すばやく自分たちの組にもぐりこんだ。

「でも、早かったね。」

吾一はいっしょにもぐりこんだ作次に、小声で言った。

「うん。」

作次は駆け通しだったので、ことばが続かなかった。彼は一度、息をついてから言った。

「おれたちも、あれからすぐ、駆けてきたんだよ。」

「じゃ、寄らなかつたの、秋ちゃんち？」

「うん、京ちゃんだけが行ったんだ。」

「みんなも京ちゃんのこと、おいてきちゃったの。」

「ううん、そうじゃねえ、京ちゃんがね、秋ちゃんちへ行くのはおれだけでいい、みんな先へ行けって言ったんだよ。」

それを聞くと、吾一はなんだか<sup>4</sup>かげんこつでむなもとを、ドカンとやられたような気がした。

運動場にならんでいた生徒は、朝の礼がすむと、先生にみちびかれて、それぞれ教室にはいった。

京造と秋太郎がやってきたのは、それから七、八分もたったあとのことだった。

「いま、なんの時間か知っているか。」

<sup>つぎの</sup>次野先生は教壇の上から、ふたりをにらみつけた。

「福野、おまえはなんでおくれたんだ。」

「……………」

「寝ぼうをしたんだな。」

秋太郎は返事をするかわりに、あたまのてっぺんに手をやって、つるつるなでまわした。

「まっさきが修身の時間だというのに、朝寝をするやつがあるか。——小村、おまえはどうしたんだ。」

京造はなんにも言わないで、黙って立っていた。

「おまえも、朝寝をしたんか。」

京造は答えなかった。結んだ口を心もちゆがめただけだった。

「しよのないやつだ。ふたりとも、そこに立っていないさい。」

秋太郎はまた、あたまをなであげた。

京造はじろつと、教壇のほうをにらんだが、すぐ姿勢を正しくして、C立った。

吾一は京造が気の毒でならなかった。なぜ京造はほんとうのことを言わないのかしらと思った。



自分は朝ねぼうをしていたのではありません。これこれでおくれたんですと、はっきり言えばいいじゃないか。自分のことは、自分じゃ言いにくいのかしら。それなら、作次が、なんとかひとこと、言つてやればいいのと思つた。が、吾一にも、「先生」と手をあげる勇氣はなかつた。

先生は前の話を続けた。しかし吾一には、その話はあまりあたまにはいらなかつた。<sup>5</sup> 先生の話よりも、目の前にいる京造の姿のほうが、もっと大きく、彼の上にのしかかつてきた。因果なことに、彼は背が低いものだから、いちばん前の机にいた。そのすぐ前に京造は立っているのである。いやでもふたりは顔を合わせないわけにはいかなかつた。

ふたりの目と目がかち合った。吾一はあいての目を見ることができなかつた。彼はあわてて目をふせてしまつた。

向こうは学校におくれてきたのだ。そして立たされているのだ。こっちはきちんと学校にきたのだ。どっちが正しいか、そんなことはわかりきつたことだ。それでいながら、<sup>6</sup> 吾一の心は草の葉のようにゆれていた。

※1 修身 道德や徳目を教える旧制の学校の教科。

※2 こつぱ 木の切れ端。<sup>はし</sup>木のけずりくず。

※3 小使いさん 「用務員さん」の古い呼び名。

※4 しお あることをするのに最適の時。好機。

(山本有三 『路傍の石』)

問1 ——— 線1 「自分のほうがまちがってるような気がして、吾一は、あとのことばが出なかった」とありますが、この時の吾一の気持ちとして最も適切なものを、次のア～オから一つ選び、記号で答えなさい。

ア 秋太郎だけのために、しかも大切な修身の授業に遅刻するのはいけないことだと思っていたが、ひとり残される秋太郎の気持ちを考える京造の言葉を聞いて、京造の言うとおりだと思っている。

イ 学校に遅刻して先生に怒られるのは絶対にいけないことだと思っていたが、秋太郎をおいて自分だけ遅刻をしないように先に学校に行くと、あとでみんなにきらわれると思ひ何も言えなくなっている。

ウ 遅刻をすることは絶対にいけないことだとわかっていたが、京造にひどく怒られて、遅刻をすることよりも秋太郎をおいていくことの方がいけないことだとわかり、自分が間違っていたことがわかった。

エ 修身の時間に遅刻することは普通の遅刻以上にいけないことだと思っていたが、秋太郎のことを思う京造のやさしさに感動し、遅刻することなどどうでもいいことだと気づき、自分のことしか考えていなかったことに申し訳ない気持ちでいっぱいになっている。

オ 遅刻をすることはいけないことで自分は絶対に遅刻はしないと信じていたが、「もう少し待とうよ。」という京造の言葉にだれも反対しなかったので、自分もみんなと同じようにするしかないとおきらめている。

問2 ——— 線2 「青いけむりがしばらく、くすぶっていたが、まもなく、ぱあっと燃えあがった」とありますが、この文章の中で何度も出てくるたき火に関する表現は、どのような役割をしていると考えられますか。最も適切なものを、次のア～オから一つ選び、記号で答えなさい。

ア 言いたいことをはっきり言えない吾一のつらい気持ちを表す役割。

イ 遅刻することを気にしてもやもやする吾一の気持ちを表す役割。

ウ 友達を何より大切に思う京造のあたたかい気持ちを表す役割。

エ 吾一と京造の目に見えないライバル心を表す役割。

オ 秋太郎を待つみんなの気持ちや様子を表す役割。

問3 文中の①・②・③・④に当てはまる言葉を、次のア～エからそれぞれ一つ選び、記号で答えなさい。ただし、同じ記号を使うことはできません。

ア だんだん      イ どんどん      ウ バタバタと      エ どやどやと

問4 文中のA・B・Cに当てはまる言葉を、次のア～オからそれぞれ一つ選び、記号で答えなさい。

A ア とつさに  
イ 無理やり  
ウ 勢いよく  
エ さすがに  
オ 驚いておどろか

B ア あわてた  
イ 悲しい  
ウ ほっとした  
エ 困った  
オ 悔しいくや

C ア そっと  
イ きりっと  
ウ がさっと  
エ どかっと  
オ にやっと

問5 ——線3「えがおをつくって」とありますが、この時の「えがお」はどのような気持ちのこもったえがおだと考えられますか。最も適切なものを、次のア～オから一つ選び、記号で答えなさい。

- ア はずかしい気持ち。
- イ ほっとした気持ち。
- ウ ばかにした気持ち。
- エ 喜ばしい気持ち。
- オ 悲しい気持ち。

問6 ——線4「げんこつでむなもとを、ドカンとやられたような気がした」とありますが、なぜこのような気持ちになったのですか。わかりやすく説明しなさい。

問7 ——線5「先生の話よりも、目の前にいる京造の姿のほうが、もっと大きく、彼の上のしかかってきた」とありますが、吾一はなぜそのように感じたのですか。理由として最も適切なものを、次のア～オから一つ選び、記号で答えなさい。

ア 京造が遅刻をしたのは朝ねぼうのせいではなくみんなを先に行かせて秋太郎を迎えにいったせいなのに、そのことを何も説明しない京造の気持ちが全く理解できず、どうしたら京造が先生に怒られずにすむか考えていたから。

イ 京造が遅刻をしたのは朝ねぼうのせいではなくみんなを先に行かせて秋太郎を迎えにいったせいなのに、自分のことで言いにくい京造に代わって作次がなんとか言ってやればいいのという思いでいったから。

ウ 京造が遅刻をしたのは朝ねぼうのせいではなくみんなを先に行かせて秋太郎を迎えにいったせいなのに、何も説明できない京造に代わって手をあげて先生に本当のことを言う勇氣のない吾一は、そんな自分がくやしくてたまらなかったから。

エ 京造が遅刻をしたのは朝ねぼうのせいではなくみんなを先に行かせて秋太郎を迎えにいったせいなのに、そのことを一言も言わずだまって怒られていた京造の姿が、友達をおいて先に来てしまった吾一にはとてもかなわない存在に思えたから。

オ 京造が遅刻をしたのは朝ねぼうのせいではなくみんなを先に行かせて秋太郎を迎えにいったせいなのに、京造も自分では言いにくく、作次も吾一も何も言えず、いつも本当のことがあやふやになってしまうことに大きな疑問を感じていたから。

問 8 ——線 6「吾一の心は草の葉のようにゆれていた」とありますが、具体的にどのような

気持ちでゆれていたのですか。くわしく説明しなさい。

【三】 次の各問いに答えなさい。

問1 次の①～⑫の——線について、カタカナは正しい漢字に直し、漢字は読み方をひらがなで答えなさい。

- ① 秋のミカクを楽しむ。
- ② この場所でタイキする。
- ③ フンマツを水にとかす。
- ④ サイシンの注意をはらう。
- ⑤ 石と玉とをシキベツする。
- ⑥ 鳥の鳴き声をロクオンする。
- ⑦ 昆虫のヒョウホンを作る。
- ⑧ 戦後のゲキドウ期をふり返る。
- ⑨ 作者の意図を読みとる。
- ⑩ 二百年の年月を経て完成した。
- ⑪ 険しい山を登りきる。
- ⑫ 身のまわりを整える。

問2 次の各組の①～③は言葉が反対の意味になるように、④～⑥は同じような意味になるように□に当てはまる漢字一字をそれぞれ答えなさい。

- ① 集合—解 □      ② 運動—□ 止      ③ 拡大—□ 小
- ④ 用意—□ 備      ⑤ 真心—□ 意      ⑥ 意外—□ 外

問3 次の①～⑥の **A**・**B** に当てはまる言葉を、あとの語群からそれぞれ一つずつ選び、

記号で答えなさい。(ただし同じ記号を二度以上使うことはありません。)

- ① 当時の資料が全て火災で焼失してしまい、事件の真相は **A** の **B** だ。
- ② 祖父が残してくれた **A** の **B** の三百万円で事業を立ち上げた。
- ③ 小さな畑でありふれた野菜を育てても、**A** の **B** ほどしかもうからない。
- ④ 今回の実験はまだまだ **A** の **B** で、本格的な実用化をめざしている。
- ⑤ 困難も多い **A** の **B** だが、ここを抜けた先に成功が待っているはずだ。
- ⑥ この城の主は **A** の **B** を一切受け取らないことで有名だったそうだ。

**A** の語群

ア	雀 <small>すずめ</small>	イ	虫	ウ	虎 <small>とら</small>	エ	いばら
オ	やぶ	カ	かや	キ	袖 <small>そで</small>	ク	序

**B** の語群

サ	口	シ	息	ス	涙 <small>なみだ</small>	セ	外
ソ	中	タ	下	チ	道	ツ	子

